

2026 年度 産業医科大学医学部皮膚科

A. 専門医研修の教育ポリシー：

研修を終了し所定の試験に合格した段階で、皮膚科専門医として信頼され安全で標準的な医療を国民に提供できる十分な知識と技術を獲得できることを目標とする。医師としての全般的な基本能力を基盤に、皮膚疾患の高度な専門的知識・治療技能を修得し、関連領域に関する広い視野をもって診療内容を高める。皮膚科の進歩に積極的に携わり、患者と医師との共同作業としての医療の推進に努める。医師としてまた皮膚科専門医として、医の倫理の確立に努め、医療情報の開示など社会的要望に応える。

B. プログラムの概要：

本プログラムは、産業医科大学病院を研修基幹施設として、独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター、愛媛大学医学部附属病院、佐賀大学医学部附属病院、独立行政法人国立病院機構鹿児島医療センター、独立行政法人地域医療機能推進機構九州病院、小倉記念病院、独立行政法人地域医療機能推進機構下関医療センター、山口大学医学部附属病院、宗像水光会総合病院、熊本大学病院、北海道大学病院、北九州総合病院を研修連携施設として、独立行政法人労働者健康安全機構九州労災病院門司メディカルセンター 皮膚科、独立行政法人労働者健康安全機構九州労災病院、産業医勤務先各事業所を準連携施設として加えた研修施設群を統括する研修プログラムである。なお、本プログラムは各研修施設の特徴を生かした複数の研修コースを設定している。（項目 J を参照のこと）

C. 研修体制

研修基幹施設：産業医科大学病院皮膚科

研修プログラム統括責任者（指導医）：澤田 雄宇 専門領域：アレルギー、皮膚免疫学、乾癬

指導医：佐々木 奈津子 専門領域：アレルギー、皮膚悪性腫瘍

指導医：櫻木 友美子 専門領域：アレルギー、乾癬、アトピー性皮膚炎

指導医：天方 葉子 専門領域：皮膚悪性腫瘍

指導医：田代 朋子 専門領域：皮膚アレルギー

指導医：金岡 亜也加 専門領域：アレルギー、乾癬、アトピー性皮膚炎

施設特徴：

入院患者は皮膚悪性腫瘍、自己免疫性水疱症、重症薬疹など多岐にわたる。外来患者数は 1 日約 120 名にのぼり、豊富な経験を積むことが可能。北九州市西部から周辺の皮膚悪性腫瘍特に悪性黒色腫患者のセンターとなっている。また、年間手術件数は約 400 件を超える。研究の面では、いくつかのグループを作り、指導医との連携を強め、多様な研究結果を創出している。

研修連携施設：独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター

所在地：群馬県高崎市高松町 3 6

プログラム連携施設担当者（指導医）：岡田 悦子

特徴：指導医の下、地域医療の中核病院の勤務医として、第一線の救急医療、処置、手術法を習得する。

研修連携施設：愛媛大学医学部附属病院

所在地：愛媛県東温市志津川 454

プログラム連携施設担当者（指導医）：藤澤 康弘

特徴：急性期疾患や頻繁に関わる疾病に適切に対応できる総合的な診療能力を培い、大学附属病院として専門性の高い疾患の診断・治療を習得する。さらに地域医療の実践、病診連携を習得し、産業医科大学皮膚科の研修を補完する。

研修連携施設：佐賀大学医学部附属病院

所在地：佐賀市鍋島五丁目 1 番 1 号

プログラム連携施設担当者（指導医）：杉田 和成

特徴：専門外来として、乾癬外来のみであるが、一般外来の中で、広くアレルギー性疾患・アトピー性皮膚炎・皮膚腫瘍などの診療を行い、外来患者数は 1 診療日あたり平均 60 名にのぼり、豊富な経験を積むことが可能。また、年間手術件数は局所麻酔（含生検術）600 件、全身麻酔 60 件を超える。研究の面では、複数のグループを作り、指導医との連携を強め、多様な研究結果を創出している。佐賀県内の皮膚癌治療センターとなっている。

研修連携施設：独立行政法人 国立病院機構 鹿児島医療センター

所在地：鹿児島県鹿児島市城山町8番1号

プログラム連携施設担当者（指導医）：松下 茂人

特徴：指導医の下、地域医療の中核病院の勤務医として、皮膚悪性腫瘍をはじめとした様々な疾患の診療・検査・手術手技などを習得する。

研修連携施設：独立行政法人 地域医療機能推進機構 九州病院

所在地：福岡県北九州市八幡西区岸の浦1丁目8番1号

プログラム連携施設担当者（指導医）：小田 友子

特徴：指導医の下、地域医療の中核病院の勤務医として、第一線の救急医療、処置、手術法を習得する。

研修連携施設：小倉記念病院

所在地：福岡県北九州市小倉北区浅野3丁目2-1

プログラム連携施設担当者（指導医）：吉岡 学

特徴：小倉記念病院の皮膚科研修は、循環器診療を基盤とした高度急性期医療の中で、全身疾患と関連する皮膚病変を実践的に学べる点に特徴がある。皮膚外科手技に加えて、薬剤性皮膚障害や重症アレルギー性皮膚疾患への対応を通じて、全身管理能力を備えた皮膚科医の育成を目指す。また、循環器内科などをはじめとした他科との密接な連携により、周術期管理や重症患者の皮膚トラブルへの介入を経験でき、臨床力の深化とともに、血管炎や薬疹などの研究領域への発展も期待される。

研修連携施設：独立行政法人地域医療機能推進機構 下関医療センター

所在地：山口県下関市上新地町3-3-8

プログラム連携施設担当者（指導医）：赤松 洋子

特徴：指導医の下、地域医療の中核病院の勤務医として、第一線の救急医療、処置、手術法を習得する。

研修連携施設：山口大学医学部附属病院

所在地：山口県宇部市南小串1-1-1

プログラム連携施設担当者（指導医）：下村 裕

特徴：外来：診察医に陪席し、外来診察、皮膚科的検査、治療を経験する。

研修連携施設：宗像水光会総合病院

所在地：福岡県福津市日蔭野5-7-1

プログラム連携施設担当者（指導医）：片山 絢子

特徴：指導医の下、地域医療の中核病院の勤務医として、皮膚科の一般的な処置、手術法を習得する。

研修連携施設：熊本大学病院

所在地：熊本市中央区本荘1-1-1

プログラム連携施設担当者（指導医）：福島 聡

特徴：外来：診察医に陪席し、外来診察、皮膚科的検査、治療を経験する。

研修連携施設：北海道大学病院

所在地：札幌市北区北14条西5丁目

プログラム連携施設担当者（指導医）：氏家 英之

特徴：北海道大学医学部皮膚科では医学一般の基本的知識技術を習得させた後、難治性疾患、稀な疾患などより専門性の高い疾患の診断・治療の研修を行う。また、皮膚悪性腫瘍に対する手術療法、化学療法、終末期医療を習得する。さらに医師としての診療能力に加え、教育・研究などの総合力を培う。少なくとも1年間の研修を行う。

研修連携施設：北九州総合病院

所在地：福岡県北九州市小倉北区東城野町1番1号

プログラム連携施設担当者（指導医）：吉岡 はるな

特徴：北九州総合病院皮膚科では、実践的かつ体系的な研修プログラムを提供している。皮膚外科領域においては、皮膚悪性腫瘍の切除、良性腫瘍の摘出術、爪疾患の外科的治療などに日常的に携わる機会があり、確実な手技の習得が可能である。診療の中心は、湿疹・皮膚炎、蕁麻疹、乾癬、尋常性ざ瘡、感染症、水疱症、膠原病など、皮膚科領域におけるcommon diseaseを幅広くカバーしており、診断力とマネジメント能力の向上が期待できる。また、生物学的製剤による治療を積極的に導入しており、アトピー性皮膚炎、乾癬、慢性蕁麻疹などの疾患に対する最新治療の適応判断と運用についても研修の中で学ぶことができる。外来、病棟、検査、手術など多面的な診療経験を積むことで、皮膚科医としての基盤を固めつつ、地域医療の中核を担う視点も養うことができる。

研修準連携施設：独立行政法人労働者健康安全機構 九州労災病院 門司メディカルセンター 皮膚科

所在地：福岡県北九州市門司区東港町3-1

研修準連携施設：独立行政法人 労働者健康安全機構 九州労災病院

研修準連携施設：産業医勤務先各事業所

研修管理委員会に関して

研修基幹施設には、専攻医の研修を統括的に管理するための組織として以下の研修管理委員会を置く。研修管理委員会委員は研修プログラム統括責任者、プログラム連携施設担当者、指導医、他職種評価に加わる看護師等で構成される。研修管理委員会は、専攻医研修の管理統括だけでなく専攻医からの研修プログラムに関する研修評価を受け、施設や研修プログラム改善のフィードバックなどを行う。専攻医は十分なフィードバックが得られない場合には、専攻医は日本専門医機構皮膚科領域研修委員会へ意見を提出できる

研修管理委員会委員：

委員長：澤田 雄宇（産業医科大学皮膚科 教授）
 委員：佐々木 奈津子（産業医科大学皮膚科 講師）
 委員：櫻木 友美子（産業医科大学病院皮膚科 助教）
 委員：天方 葉子（産業医科大学病院皮膚科 助教）
 委員：金岡 亜也加（産業医科大学病院皮膚科 助教）
 委員：赤松 洋子（下関医療センター皮膚科部長）
 委員：松下 茂人（鹿児島医療センター皮膚科部長）
 委員：下村 裕（山口大学医学部皮膚科 教授）
 委員：川原 光（産業医科大学病院皮膚科 助教）
 委員：田代 朋子（産業医科大学病院皮膚科 助教）
 委員：岡田 悦子（高崎総合医療センター皮膚科 部長）
 委員：片山 絢子（宗像水光会総合病院皮膚科 科長）
 委員：吉岡 学（小倉記念病院皮膚科 科長）
 委員：福島 聡（熊本大学病院 教授）
 委員：杉田 和成（佐賀大学医学部付属病院 教授）
 委員：瀬戸山 絢子（九州労災病院皮膚科 科長）
 委員：小田 友子（労働者健康安全機構 九州労災病院 科長）
 委員：藤澤 康弘（愛媛大学医学部附属病院 教授）
 委員：吉岡 はるな（北九州総合病院 科長）
 委員：中島 大毅（戸畑総合病院 科長）
 医員：氏家 英之（北海道大学病院 皮膚科 教授）

他科・他職種

委員：清水直美（産業医科大学病院皮膚科外来 看護主任）

研修資源実績（外来患者数・入院患者数・指導医数：本プログラムの按分数）

	1日平均外 来患者数	1日平均入 院患者数	局所麻酔年間手術 数（含生検術）	全身麻酔年 間手術数	指導 医数
産業医科大学病院	73.7	11.4	1215	65	3
独立行政法人国立病院機構高 崎総合医療センター	5.1	1.3	236	18	0.5
愛媛大学医学部附属病院	5	1	199	201	1
佐賀大学医学部附属病院	1	1	655	101	0.1
独立行政法人 国立病院機構 鹿児島医療センター	0.1	0.1	922	191	0.1
独立行政法人 地域医療機能 推進機構 九州病院	19.9	1	1	0	0.5
小倉記念病院	24.6	1	96	0	1
独立行政法人地域医療機能推 進機構 下関医療センター	19.1	4.2	268	10	0.5
山口大学医学部附属病院	3	1	453	69	0.6
宗像水光会総合病院	10	0.05	203	0	0.5
熊本大学病院	1	1	243	367	0.2
北海道大学病院	1	1	600	50	1
北九州総合病院	1	1	0	0	1
合計	164.5	25.05	5091	1072	10.0

D. 募集定員：3名

①通常プログラム：3名

E. 研修応募者の選考方法：

書類審査，小論文および面接により決定（産魚医科大学皮膚科のホームページ等で公表する）。また，選考結果は，本人あてに別途通知する。なお，応募方法については，応募申請書を産業医科大学皮膚科のホームページよりダウンロードし，履歴書と併せて提出すること。

F. 研修開始の届け出：

選考に合格した専攻医は，研修開始年の3月31日までにプログラム研修開始届に必要な事項を記載のうえ，プログラム統括責任者の署名をもらうこと。その後，同年4月30日までに皮膚科領域専門医委員会（hifu-senmon@dermatol.or.jp）に通知すること。

G. 研修プログラム 問い合わせ先：

産業医科大学病院皮膚科学教室
澤田雄宇

TEL：093-691-7445

FAX：093-691-0907

メールアドレス：j-hifuka@mbox.med.uoeh-u.ac.jp

H. 到達研修目標：

本研修プログラムには，いくつかの項目において，到達目標が設定されている。別冊の研修カリキュラムと研修の記録を参照すること。

I. 研修施設群における研修分担：

それぞれの研修施設の特徴を生かした皮膚科研修を行い、研修カリキュラムに掲げられた目標に従って研修を行う。

- 産業医科大学医学部皮膚科では医学一般の基本的知識技術を習得させた後、難治性疾患、稀な疾患などより専門性の高い疾患の診断・治療の研修を行う。さらに医師としての診療能力に加え、教育・研究などの総合力を培う。また、少なくとも1年間の研修を行う。また、同様の研修を
- 山口大学皮膚科、熊本大学皮膚科、佐賀大学皮膚科では、急性期疾患や頻繁に関わる疾病に適切に対応できる総合的な診療能力を培い、大学附属病院として専門性の高い疾患の診断・治療を習得する。さらに地域医療の実践、病診連携を習得し、産業医科大学皮膚科の研修を補完する。小倉記念病院皮膚科、九州労災病院皮膚科、下関医療センター皮膚科、JCHO九州病院皮膚科、門司メディカルセンター皮膚科、高崎総合医療センター皮膚科では、急性期疾患、頻繁に関わる疾病に適切に対応できる総合的な診療能力を培い、地域医療の実践、病診連携を習得し、産業医科大学医学部皮膚科の研修を補完する。鹿児島医療センターでは、「地域がん拠点病院」であり、当該施設で悪性黒色腫や基底細胞がんなどの皮膚がんの診療に携わることができる。また、全国の皮膚がんを専門に診療している施設と提携していることから、最先端の皮膚がん診療の研修を行うことができるため、本プログラムの連携施設として登録している。これらの連携研修施設のいずれかで、少なくとも連携研修施設または、指導医不在の一人医長として研修を行う準連携施設のいずれかで、原則として少なくとも1年間の研修を行う。
- 準連携施設である産業医勤務先各事業所では指導医不在の産業医として最長2年間の研修を行う可能性がある。産業医として研修する専攻医は、産業医科大学医学部皮膚科の指導医と密に連絡を取り、診療の相談を行うとともに、可能であれば近隣の皮膚科での皮膚科研修もあわせて行う。

J. 研修内容について

1. 研修コース

本研修プログラムでは、以下の研修コースをもって皮膚科専門医を育成する。ただし、研修施設側の事情により希望するコースでの研修が出来ないこともあり得る。また、記載されている異動時期についても研修施設側の事情により変更となる可能性がある。

・通常プログラム

コース	研修1年目	研修2年目	研修3年目	研修4年目	研修5年目
a	基幹	連携	基幹	基幹	基幹
b	基幹	基幹	連携	基幹	基幹
c	連携	基幹	基幹	基幹	基幹
d	基幹	連携	基幹	準連携	準連携
e	基幹	基幹	基幹	連携	準連携
f	基幹	基幹	連携	基幹	準連携
g	連携	基幹	基幹	基幹	準連携
h	基幹	連携	準連携	基幹	基幹
i	基幹	連携	基幹	準連携	基幹
j	基幹	連携	基幹	基幹	大学院 (臨床)
k	基幹	連携	基幹	大学院 (臨床)	大学院 (臨床)

a：研修基幹施設を中心に研修する基本的なコース。最終年次に大学で後輩の指導を行うことにより自らの不足している部分を発見し補う。

b：3年目に連携施設にて研修を行うコース。

c：研修連携施設から研修を開始するコース。

d：2年目に連携施設にて、4,5年目に準連携施設で研修を行うコース。

e：4年目に連携施設にて、5年目に準連携施設で研修を行うコース。

f：3年目に連携施設にて、5年目に準連携施設で研修を行うコース。

g：1年目に連携施設にて、5年目に準連携施設で研修を行うコース。

h：2年目に連携施設にて、3年目に準連携施設で研修を行うコース。

i：2年目に連携施設にて、4年目に準連携施設で研修を行うコース。

j：研修5年目より臨床業務を行いながら大学院に進学するコース。

k：研修4年目より臨床業務を行いながら大学院に進学するコース。

・通常プログラム

コース	研修1年目	研修2年目	研修3年目	研修4年目	研修5年目
a	基幹	基幹	連携	山口県 連携施設	山口県 連携施設
b	山口県 連携施設	山口県 連携施設	連携	基幹	基幹
c	熊本県 連携施設	熊本県 連携施設	連携	基幹	基幹
d	佐賀県 連携施設	佐賀県 連携施設	連携	基幹	基幹
	基幹	連携	基幹	連携	連携

＊連携プログラム枠にて採用されたものは、5年間の研修期間のうち、2年以上は特定の地域にて研修を行います。上記は例であり、一部施設や順序などが変更になることがあります。

a：最初の3年間で大学および研修連携施設などで研修し、残りの2年間で山口県などの連携施設で研修する。

b：最初の2年間で山口県などの連携施設で研修し、残りの3年間で大学および研修連携施設で研修する。

2. 研修方法

1) 産業医科大学病院皮膚科

外来：指導医の診察に陪席し外来診察を学ぶとともに、処置当番として皮膚科的検査、治療を経験する。指導医の監督のもとで実際の診療を行う。

病棟：病棟医長を筆頭に複数医師の診療チームを構成する。専攻医は指導医のもと担当患者の診察、検査、外用療法、手術手技を習得する。朝夕の病棟回診で受け持ち患者のプレゼンテーションを行い、評価を受ける。毎週の臨床、病理カンファレンスで症例発表を行い、評価を受ける。

皮膚科学会主催の必須の講習会を受講し、年に2回以上筆頭演者として学会発表を行う。また、皮膚科関連の学会、学術講演会、セミナーに積極的に参加する。病院が実施する医療安全講習会に定期的に参加する。年に1編以上筆頭著者で論文を作成することを目標とする。

研修の週間予定表：

	月	火	水	木	金	土	日
午前	外来	病棟 手術	外来	病棟 手術	外来		
午後	病棟	病棟 手術	病棟 回診 カンファレンス	病棟 手術	病棟		

2) 連携施設

独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター：

皮膚科学会主催の必須の講習会を受講し、年に2回以上筆頭演者として学会発表を行う。皮膚科関連の学会、学術講演会、セミナーに積極的に参加する。病院が実施する医療安全講習会に定期的に参加する。

愛媛大学医学部附属病院：

外来：診察医に陪席し、外来診察、皮膚科的検査、治療を経験する。病棟：病棟医長のもと数チームの診療チームを構成する。専攻医は指導医のもと担当患者の診察、検査、外用療法、手術手技を習得する。毎週の病棟回診で受け持ち患者のプレゼンテーションを行い、評価を受ける。毎週の病理カンファレンスで症例発表を行い、評価を受ける。皮膚科学会主催の必須の講習会を受講し、年に2回以上筆頭演者として学会発表を行う。また、皮膚科関連の学会、学術講演会、セミナーに積極的に参加する。病院が実施する医療安全講習会に定期的に参加する。年に1編以上筆頭著者で論文を作成することを目標とする。

佐賀大学医学部附属病院：

外来：診察医に陪席し、外来診察、皮膚科的検査、治療を経験する。病棟：病棟医長のもと診療チームを構成する。専攻医は指導医のもと担当患者の診察、検査、外用療法、手術手技を習得する。毎週の病棟カンファレンスで受け持ち患者のプレゼンテーションを行い、評価を受ける。毎週の病理組織検討会でも症例発表を行い、評価を受ける。勉強会では、定期的に興味をもったテーマや論文の紹介を行う。また、病棟および外来のスライドを供覧し、受け持ち患者以外の疾患についても知識を深める。皮膚科学会主催の必須の講習会を受講し、年に1回以上筆頭演者として学会発表を行う。また、皮膚科関連の学会、学術講演会、セミナーに積極的に参加する。病院が実施する医療安全講習会に定期的に参加する。年に1編以上筆頭著者で論文を作成することを目標とする。

研修の週間予定表：

	月	火	水	木	金	土	日
午前	手術 外来	外来	回診 外来	手術 外来	外来		
午後	手術 病棟	病棟 カンファレンス 病理組織検討会	病棟	病棟	病棟		
		勉強会 スライド供覧					

独立行政法人 国立病院機構 鹿児島医療センター：

皮膚科関連の学会、学術講演会、セミナーに積極的に参加する。病院が実施する医療安全講習会に定期的に参加する。

研修の週間予定表：

	月	火	水	木	金	土	日
午前	外来	手術	外来	手術	外来		
午後	手術 病棟	手術 病棟	カンファレンス 病棟	手術 病棟	手術 病棟		

*2ヶ月に1回、当院病理診断科や近隣医療機関の病理専門医、皮膚科開業医・勤務医と合同で、皮膚病理カンファレンスを開催している。

独立行政法人 地域医療機能推進機構 九州病院：

皮膚科関連の学会、学術講演会、セミナーに積極的に参加する。病院が実施する医療安全講習会に定期的に参加する。

研修の週間予定表：

	月	火	水	木	金	土	日
午前	外来	外来	外来	外来	外来		
午後	病棟 手術	病棟 手術	褥瘡回診	病棟 手術	病棟 手術		

小倉記念病院：

循小倉記念病院における皮膚科研修は、循環器診療に特化した高度急性期病院の特性を踏まえ、薬疹をはじめとしたアレルギー性皮膚疾患の診療を中心に修練を行う。抗血小板薬や抗菌薬など多様な薬剤使用下での皮膚障害に対応することで、実践的な診断力とマネジメント能力を養う。また、心疾患合併患者や抗凝固療法中患者に対する皮膚外科手技や周術期管理を経験し、全身管理を含めた総合的な臨床能力の向上を図る。さらに、皮膚科関連の学会・学術講演会・セミナーへ積極的に参加し最新知見の習得に努めるとともに、院内で実施される医療安全講習会にも定期的に参加し、安全で質の高い医療の実践を修得する。

研修の週間予定表：

	月	火	水	木	金	土	日
午前	外来	外来	外来	外来	外来		
午後	病棟 手術	病棟 手術	病棟 手術カンファレンス	病棟 手術	病棟 手術		

独立行政法人地域医療機能推進機構 下関医療センター：

皮膚科関連の学会，学術講演会，セミナーに積極的に参加する。病院が実施する医療安全講習会に定期的に参加する。

研修の週間予定表：

	月	火	水	木	金	土	日
午前	外来	外来	外来	外来	外来		
午後	病棟 手術	褥瘡回診 カンファレンス	病棟	手術 病棟 カンファレンス	手術 病棟		

山口大学医学部附属病院：

病棟：病棟医長のもと数チームの診療チームを構成する。専攻医は指導医のもと担当患者の診察，検査，外用療法，手術手技を習得する。毎週の病棟回診で受け持ち患者のプレゼンテーションを行い，評価を受ける。毎週のカンファレンスで症例および病理組織標本の発表を行い，評価を受ける。抄読会では1回/月 英文論文を紹介する。皮膚科学会主催の必須の講習会を受講し，年に2回以上筆頭演者として学会発表を行う。また、皮膚科関連の学会，学術講演会，セミナーに積極的に参加する。病院が実施する医療安全講習会に定期的に参加する。年に1編以上筆頭著者で論文を作成することを目標とする。

研修の週間予定表：

	月	火	水	木	金	土	日
午前	外来 病棟	外来 病棟 手術室手術	外来 病棟	外来 病棟	外来 病棟 手術室手術		
午後	病棟 手術 室手術 回 診 カン ファレン ス	病棟 手術 室手術	病棟 カン ファレン ス	病棟 手術 室手術	病棟 手術 室手術		

宗像水光会総合病院：

皮膚科関連の学会，学術講演会，セミナーに積極的に参加する。病院が実施する医療安全講習会に定期的に参加する。

研修の週間予定表：

	月	火	水	木	金	土	日
午前	外来	外来	外来	外来	外来		
午後	病棟 手術	病棟 手術	病棟 手術	病棟 手術	病棟 手術		

熊本大学病院：

病棟：病棟医長のもと3チームの診療チームを構成する。専攻医は指導医のもと担当患者の診察，検査，外用療法，手術手技を習得する。毎週のチームカンファレンスでは指導医とともに患者毎にグループ討論を行う。毎週の病棟回診で受け持ち患者のプレゼンテーションを行い，評価を受ける。毎週の病理カンファレンスで症例発表を行い，評価を受ける。毎週の抄読会に参加し最新の知見を学ぶ。また自ら2回/年 英文論文を紹介する。毎月の病棟勉強会に参加し、疾患ごとの検査方針や診断アルゴリズム、標準治療を学ぶ。皮膚科学会主催の必須の講習会を受講し，年に2回以上筆頭演者として学会発表を行う。また、皮膚科関連の学会，学術講演会，セミナーに積極的に参加する。病院が実施する医療安全講習会、感染対策講習会に定期的に参加する。年に1編以上筆頭著者で論文を作成することを目標とする。

研修の週間予定表：

	月	火	水	木	金	土	日
午前	外来 手術	抄読会 カ ンファレ ンス	外来	外来 手術	外来 手術		
午後	病棟 チ ームカン ファレン ス	カンファ レンス 病 理	病棟 勉強 会	病棟	病棟		

北海道大学病院：

外来：診察医に陪席し、外来診察、皮膚科的検査、治療を経験する。病棟：病棟医長のもと数チームの診療チームを構成する。専攻医は指導医のもと担当患者の診察、検査、外用療法、手術手技を習得する。毎週の病棟回診で受け持ち患者のプレゼンテーションを行い、評価を受ける。毎週の病理カンファレンスで症例発表を行い、評価を受ける。皮膚科学会主催の必須の講習会を受講し、年に2回以上筆頭演者として学会発表を行う。また、皮膚科関連の学会、学術講演会、セミナーに積極的に参加する。病院が実施する医療安全講習会に定期的に参加する。年に1編以上筆頭著者で論文を作成することを目標とする。

研修の週間予定表：

	月	火	水	木	金	土	日
午前	外来	外来	外来 手術	病棟回診	外来		
午後	病棟	病棟	病棟 カンファレンス	外来	病棟		

北九州総合病院：

北九州総合病院皮膚科における研修は、実践を重視した段階的な教育体制を基盤として構築されている。初期段階では、上級医の指導のもとで外来・病棟診療に同席しながら基本的な問診・視診・検査・処置の流れを学び、徐々に自らが主体となって診療を行うスタイルへ移行する。病棟管理では、多様な皮膚疾患に対する全身精査や治療を経験し、他科との連携や全身管理能力を高める機会が多い。手術研修については、皮膚腫瘍の切除術、皮弁・植皮術などを段階的に経験し、術前評価から術後管理まで一貫して関与することで、外科的判断力と手技の習得が可能となる。さらに、定期的な病理カンファレンスや抄読会、院内勉強会を通じて、知識の整理と最新のエビデンスの習得を図る。生物学的製剤の導入に関しても、対象疾患の評価から投与管理、副作用対応までを経験し、治療選択に関わる臨床的判断力を養うことができる。

研修の週間予定表：

	月	火	水	木	金	土	日
午前	外来診療	外来診療	外来診療	外来診療	外来診療		
午後	病棟診療	病棟診療	病棟診療	病棟診療	病棟診療		

3) 大学院(臨床)

基本的に日中は大学病院にて1)と同様にフルタイムで研修し、17時以降、大学院講義出席、臨床研究、論文作成等を行う。

4) 準連携施設

産業医勤務先事業所ごとに勤務条件が異なり、産業医として研修する専攻医は、産業医科大学医学部皮膚科の指導医と密に連絡を取り、診療の相談を行うとともに、可能であれば近隣の皮膚科での皮膚科研修をあわせて行う。水光会病院、小倉記念病院では、産業医科大学医学部皮膚科の指導医と密に連絡を取り、診療の相談を行うとともに、一人医長として研修を行う。

研修の年間予定表

月	行事予定
4	1年目：研修開始。皮膚科領域専門医委員会に専攻医登録申請を行う。2年目以降：前年度の研修目標達成度評価報告を行う。
5	福岡地方会（開催時期は要確認）
6	日本皮膚科学会総会（開催時期は要確認）
7	
8	研修終了後：皮膚科専門医認定試験実施
9	福岡地方会（開催時期は要確認）
10	試験合格後：皮膚科専門医認定
11	福岡地方会（開催時期は要確認）
12	研修プログラム管理委員会を開催し、専攻医の研修状況の確認を行う（開催時期は年度によって異なる）
1	
2	5年目：研修の記録の統括評価を行う。
3	当該年度の研修終了し、年度評価を行う。皮膚科専門医受験申請受付 福岡地方会（開催時期は要確認）

K. 各年度の目標：

1, 2年目：主に産業医科大学皮膚科において、カリキュラムに定められた一般目標、個別目標（1.基本的知識2.診療技術3.薬物療法・手術・処置技術・その他治療4.医療人として必要な医療倫理・医療安全・医事法制・医療経済などの基本的姿勢・態度・知識5.生涯教育）を学習し、経験目標（1.臨床症例経験2.手術症例経験3.検査経験）を中心に研修する。

3年目：経験目標を概ね修了し、皮膚科専門医に最低限必要な基本的知識・技術を習得し終えることを目標にする。

4, 5年目：経験目標疾患をすべて経験し、学習目標として定められている難治性疾患、稀な疾患など、より専門性の高い疾患の研修を行う。3年目までに習得した知識、技術をさらに深化・確実なものとし、生涯学習する方策、習慣を身につけ皮膚科専門医として独立して診療できるように研修する。専門性を持ち臨床に結びついた形で研究活動に携わり、その成果を国内外の学会で発表し、論文を作成する。さらに後輩の指導にもあたり、研究・教育が可能な総合力を持った人材を培う。

毎年度：日本皮膚科学会主催教育講習会を受講する。また、福岡地方会には可能な限り出席する。各疾患の診療ガイドラインを入手し、診療能力の向上に努める。

PubMedなどの検索や日本皮膚科学会が提供するE-ラーニングを受講し、自己学習に励む。

L. 研修実績の記録：

1. 「研修手帳」を、日本皮膚科学会ホームページからダウンロードし、利用すること。

2. 専攻医研修管理システムおよび会員マイページ内に以下の研修実績を記録する。経験記録（皮膚科学各論、皮膚科の検査法、理学療法、手術療法）、講習会受講記録（医療安全、感染対策、医療倫理、専門医共通講習、日本皮膚科学会主催専攻医必須講習会、専攻医選択講習会）、学術業績記録（学会発表記録、論文発表記録）。

3. 専門医研修管理委員会はカンファレンスや抄読会の出席を記録する。

4. 専攻医、指導医、総括プログラム責任者は専攻医研修管理システムを用いて下記（M）の評価を毎年保存する。

5. 「皮膚科専門医研修マニュアル」を、日本皮膚科学会ホームページからダウンロードし、確認すること。特にp.15～16では「皮膚科専攻医がすべきこと」が掲載されているので注意すること。

M. 研修の評価：

診療活動はもちろんのこと、知識の習熟度、技能の修得度、患者さんや同僚、他職種への態度、学術活動などの診療外活動、倫理社会的事項の理解度などにより、研修状況を総合的に評価され、「研修の記録」に記録される。

1. 専攻医は「研修の記録」のA.形成的評価票に自己評価を記入し、毎年3月末までに指導医の評価を受ける。また、経験記録は所定の評価期間内に指導医の確認を受ける。

2. 専攻医は年次総合評価票に自己の研修に対する評価、指導医に対する評価、研修施設に対する評価、研修プログラムに対する評価を記載し、指導医に提出する。指導医に提出しづらい内容を含む場合、研修プログラム責任者に直接伝えることとする。

3. 指導医は専攻医の評価・フィードバックを行い年次総合評価票に記載する。また、看護師などに他職種評価を依頼する。以上を研修プログラム責任者に毎年提出する。

4. 研修プログラム責任者は、研修プログラム管理委員会を開催し、提出された評価票を元に次年度の研修内容、プログラム、研修環境の改善を検討する。

5. 専攻医は研修修了時までに全ての記載が終わった「研修の記録」、経験症例レポート15例、手術症例レポート10例以上をプログラム統括責任者に提出し、総括評価を受ける。

6. 研修プログラム責任者は、研修修了時に研修到達目標のすべてが達成されていることを確認し、総括評価を記載した研修修了証明書を発行し、皮膚科領域専門医委員会に提出する。

N. 研修の休止・中断、異動：

1. 研修期間中に休職等により研修を休止している期間は研修期間に含まれない。

2. 研修期間のうち、産休・育休に伴い研修を休止している期間は最大6ヶ月までは研修期間に認められる。なお、出産を証明するための添付資料が別に必要となる。

3. 諸事情により本プログラムの中断あるいは他の研修基幹施設のプログラムへ異動する必要がある場合、すみやかにプログラム統括責任者に連絡し、中断あるいは異動までの研修評価を受けること。

○. 労務条件, 労働安全：

労務条件は勤務する病院の労務条件に従うこととする。
給与、休暇等については各施設のホームページを参照，あるいは人事課に問い合わせること。なお、当院における当直はおおむね4～6回/月程度である。

2026年4月20日
産業医科大学病院皮膚科
専門研修プログラム統括責任者
澤田 雄宇